

# 個人的な経験を加えて 文学体験を豊かにする 植山俊宏

二〇〇八年、歌集『魚政の親父』を出した。寄せられた感想の中に奇妙な一群があった。この「魚政」は自宅の近くの魚屋、寿司屋だろうというのである。一群には同じ都府県の人はいなかった。この書名は表題歌に当たる歌から採ったので、その歌の解釈がそれぞれ違っていたことになる。この歌にはモデルがある。が、それで正解が導けるだろうか。創作者の表現意図と読者の文学体験が異なることに積極的な価値はないだろうか。

四半世紀前、鳥海山を初めて目にしたときのことである。山形県を旅行していた折、突然眼前に秀麗としかいいようのない巨大な山容が飛び出してきた。案内役の友人によると鳥海山だとのこと。これが鳥海山か。だが、それ以上の感慨は浮かばず、しかし、何か心に引っかかるものを感じて、それで終わった。

全けき鳥海山はかくのごとからくれなぬの夕ばえのなか

『白き山』斎藤茂吉1946年

時を置かず、阿川弘之のエッセイを読み、阿川が茂吉の崇拜者であり、その一推しがこの鳥海山の歌であることを知った。北杜夫の『青年茂吉』にも詳しい。ちなみに杜夫は茂吉の次男である。短歌の解釈を考えてみる。短歌は俳句よりも字数が多いが、短詩形文学に括られているように情報量が少ないのが特徴である。

だから作者の表現意図と読者の理解とに食い違いが生じることがある。というより、ある程度の解釈の幅が前提で創作されている。そのことでよりよい解釈が生まれるという可能性を考えたい。

この鳥海山の歌には茂吉なりの感慨があっただろう。だが、それを追体験したり、同時代的な言説の再現を図ったりする解釈に留まっただけでは読み広がり、読み深まりがないように思われる。

この歌の成立は敗戦直後であり、疎開先で山形で茂吉は戦時中の戦争協力により社会的批判を浴びていた頃である。

だが、解釈となると、これは必要な情報ではないだろう。「かくのごと」は「全けき」からくれなぬの夕ばえ」と関連付けられるが、この光景の判断は読者により行われ、納得されるものだろう。

茂吉には茂吉の、私には私なりの心の動きがある。茂吉の同時代的な言説に従う読みを共時的な読みとすれば、私の読みは通時的な読みになる。つまり、今の「私」にとつての文学体験である。

私は、折々目にする秀麗な山にもこの歌を重ねるようにしている。先年、山陰を旅行した折、夕刻大山の麓を通った。十分な夕陽を浴びてはいなかったが、私は鳥海山の歌を思い浮かべ、この山に重ねた。解釈というより鑑賞というべきかもしれない。

文学体験とは読者個人の経験も加えて、鑑賞として発展させるべきものと考えたい。作品を作者に従属させて解釈することに留まるのは非生産性である。多少の暴走的、逸脱的な鑑賞の方が読者のその後の文学体験を豊かにするし、また読者間の対話も呼び起こすと考えられる。生産的な文学体験のあり方を提起してみた。